

終わりに

フィリピの信徒への手紙も結びに近づき、今回はフィリピの信徒の群れのなかで起きていた二人の婦人（エボディアとシンティケ）のあいだの諍いについて、パウロは慎重に取り上げ、その問題を、「主において同じ思いを抱く」ことによって解消することを勧めました。それを当事者だけに委ねるのではなく、真実の協力者よ、と呼びかけ、彼らのまわりの人々にも求めています。それは共同体の事柄だと。パウロにとって重要なのは繰り返される「主において」です。キリスト・イエスの内にあって、ということです。わたしたちの立つ場所はここだ。自分の内ではなく、自分の外、つまりキリストの内に軸足を移しなさい、そこにわたしたちが喜ぶことの出来る根拠がある。エボディアよ、シンティケよ、そこへ一緒に進み出なさい。真実な協力者たちよ、それを助けなさい。わたしたちのために、しもべの身分となることをも辞さず、ついには十字架の死に至るまで従順で謙遜なイエスが、わたしの救い主であるという真実にわたしたちはそこで出会う。この神の配慮と主の赦しの愛こそがすべての喜びの根拠であり、そこでわたしの罪の問題、死の問題が十字架で担われ、復活の希望が約束されている。わたしたちキリストに結ばれた者たちの生き方の手本はすべてここに、主において実現する。手紙を通してパウロが伝えたかったことはここに尽きています。

だから「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。」という喜びの勧めが湧き出ます。「主はすぐ近くにおられます」と、パウロはかたわらに来て下さる救い主の存在を、信徒たちに気づかせます。自分の悩みや境遇に負けるな、絶望

するな、苦悩や、悲しみよりももっと近いところに、あなたの救い主が来ておられる。主がすぐ近くにおられるという神の真実を超えて、わたしたちの身に迫るどんな真実もないのだということパウロは知っているのです。それは死ですらそうなのです。なぜならこの方は、わたしたちのために苦しみ、悩み、その一切を負って死んでくださり、蘇られた方だからです。インマヌエル＝神、我らと共にいます、という真実が、主イエス・キリストにおいて実現したことを知っているから、パウロは、どんなことでも、思い煩うのは止めなさい、死も恐れも罪も悩みも、何事も、あなたとキリストの間に割って入ることはできない。それほどまでに近いところに、わたしの魂にあの方は結びついてくださっているのだから、あなたの救い主イエスに、感謝と祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさいと勧める。それは朝顔のつるが支柱に巻き付くように、感謝と祈りと願いにおいて、ただ主イエスのみに委ねて生きるわたしたちの在り方、神に傾いて生きるキリスト者に許された生き方を示しているのです。そうすれば、あらゆる人智を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守ることになる。パウロはそう云うのです。

ここから今日、ご一緒によんだ箇所ですが、終わりに、と語りだされます。明確に、手紙をたたみにかかっているわけですが、そこでパウロが勧めることは何でしょう。すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい、と勧めています。今回、調べてみて分かったのですが、ここで挙げられている善いもののリストですが、これらはすべて当時の地中海のギリシア文化の浸透した地域で追い求めるべき道徳的目標となってい

るものです。真実、気高さ、正しさ、清さ、愛、名誉、徳や称賛といった人間が普遍的に追い求めるべき価値が挙げられているのです。これはフィリピの人にとっては耳に馴染んだ、いわば彼らが成長の過程で聞かされてきた人格形成上、お手本とすべき、身につけるべき価値であったといえるでしょう。これ自体に新しさはありません。もし新しいことがあるとすれば、わたしが思うに、パウロがこうしたギリシア的な価値について述べる時に「すべて」という言葉をつけたことです。もともと真実も、気高さ、正しさ、清さ、愛、名誉、徳といったことはそれだけで完結しているものです。しかしパウロはそれらにわざわざ「すべて真実なこと」「すべて正しいこと」、「すべて清いこと」と言った具合に、最大もらさず、欠けのない状態にして信徒たちに差し出しました。わたしたち人間の側の都合で99%真実とか、かなり気高く振る舞うとか、そういう逃げ道をふさいでしまっている。なぜこういう修飾語をつけたのだろうか。ギリシア世界に生きる人々にとって、真実を求め、気高く生き、正しさ、清さを保ち、愛や名誉を重んじるというのは理想とすべき生き方でしょう。努力目標となるものです。それに「すべて」という網のかけ方をすれば、これはもう人間の出来ることを超えたところを指し示しているようにすら思えます。しかも、パウロはこの勧めをどこに落としたかと言うと、心に留めなさいと引き取るのです。実行しなさいではありません。心に留めるように勧めるのです。つまり、フィリピの信徒たちが生きてきた地中海世界、彼らがキリストと出会う前に属していた社会の持っていた様々な人格形成上の望ましい価値、徳については、そういうものがあれば全部そっくり心に留めなさい、で納めてしまう。これはつまりパウロはイエス・キリストを經由しない真実、気高さ、正しさ、清さといったものは完全ではないと考

えているのです。それはパウロ自身が、イエス様と出会って、彼がそれまで拠り所としていた律法を守ることに非の打ちどころがなかったとか、ユダヤ人しかもベニヤミン族の出身であるとか、そういったユダヤ社会では最上の価値であったものを捨ててしまったこととつながっています。世の中が善いとするものの真実は絶対的な真実ではない、その社会の称賛する気高さとは他の社会から見た場合には真逆の可能性があり得る。神に選ばれた民以外は異邦人であり、律法を持たない、守ることのできない者たちはユダヤ教エリートから見れば救いに縁のない滅びる者たちとされる。名誉とされることだって何をしたら名誉とされるかを歴史を振り返って考えてみれば、人間の都合と欲望によって左右される、つまり人間の側の主張する相対的な正しさでしかない。そういうものは心に留めるだけでよいとパウロは考えている。そしてパウロは続けて「わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい」と語る。こちらは心の留めるのではない、実行するのです。ここに御言葉によって、つまりイエス・キリストの福音に聞き従うことによって人格と人生を共同体を形作ろうとしているフィリピの人々のチャレンジを見ることができます。この世界の価値観や、人生訓というものに左右されるのではない。時代精神や、その時代のファッション、風潮に流されてゆくのもない。もちろん、真実、気高さ、正しさ、清さというものが、それぞれの生きる社会の目標となることは間違いのないことでしょう。しかし、それを例えばわたしたちの時代で言うならば、自己実現というような言葉で表現すれば、本当に実現することが望ましいような自己であるかという検証なしに実現される自己とは恐ろしいものとなることを指摘せねばなりません。平家に非ずんば人にあらずといったような権力の

一族による独占や、ローマ人がローマ人のために武力で達成する平和、それはローマに蹂躪され、征服された者たちからは、墓場の平和と呼ばれるようなものです。人間の正しさや名誉、自己実現はそういう歪みを常に持つ。罪の問題が解決されていないからです。自分のために人を殺す、だしにする。しかし、パウロはそれとは全く違う平和を成し遂げてくださった方を知ったのです。神の座を降り、人となり、しもべの姿を取ってまで仕えて下さる権威、罪ある者のためにみずから十字架に殺し、執り成しの死を遂げられる愛、他人の命を手段として消費するのではなく、他人のために自らの命を捧げることでできた方、死に至るまで神の御心に従順であった方によりもたらされる平和があるのです。それこそが神の平和なのです。その方と出会ってパウロは目を開かれた。生き方の向きが変わった。上へ上へではなく、自分の内に世界を貪欲に取り込もうとするのではなく分かち与える方向へ、利己主義ではなく、利他主義ともいう生き方へと変えられていった。それはひとえに神の子、イエス・キリストとの出会いがもたらした変化でした。この人間を新しく生まれ変わらせ、罪と死の支配から解放するイエス・キリストの福音に出会い、聖霊によって支えられ、生かされるさまをあなたがたは、わたしの生き様から学んだでしょう、ともに恵みを受けたでしょう。一緒に居て聞き、また見たでしょう、それを真似しなさい、実行しなさい。わたしがキリストを真似たように、あなたがたもわたしの内に生きるキリストの教え、姿、それを引き映して生きるのです。そうすれば、平和の神があなたがたと共にいてくださる。なぜならば、御心を生きる者たちと共に神は働かれるからです。そこに人知を超えた平和が、神から与えられる慰めと平安が支配することを、パウロは終わりに彼らの心に刻みつけようとしているのです。牢獄の

なかになら喜びをもって生きているパウロの姿の中に、神の力が働いていることをフィリピの人々は見取ったことでしょう。このように、神を信じ、神の言葉に委ねて生きるものうちに神の平安が実現する。主がすぐ近くにおられるという真実に守られて、わたしたちの心と考えを思い煩いから引き離し、神さまのくださる平和に生きるために、パウロが勧めるように、わたしたちも主の教えの中に生きるものでありたいと願います。

お祈りいたします。